

# 新書紹介

## 地球レポート 緑と人間の危機

エリック・P・エックホルム著

石弘之・水野憲一訳

朝日新聞社 二七六頁 一、一〇〇円

「かけがえない地球」をスローガンに、一九七二年六月ストックホルムで開催された国連人間環境会議は、環境問題を人類共通の課題として検討した最初の世界的な政府間会合であり、その後の各国並びに国際機関の環境政策に大きな影響を与えてきたのは誰もが認めるところである。本書は、ストックホルム会議の十周年を記念して、エリック・エックホルム氏が、緑を中心に人間をとりまく環境の現況と将来について書き上である。

第三世界では、土地を持たない農民が増加傾向にあり、彼らの中には国立公園に入り畑を耕したり木を切ったりする者もある。政府としても、経済政策上自然保護よりも開発指向になる。つまり、自然保護区といえども「飢えに苦しむ大海の孤島」となっては永續することができないからである。著者いわく「飢え、文盲、搾取、疫病の果てしない悪循環に捕えられたこの貧困層は、毎週毎週生きるために全力をそそぎ、地球規模の環境を考える余裕はない。だが、さまざまな点において彼らがこそ裕福な人々に比べて環境悪化の影響をはるかに被っている」。したがって、ある家庭において、母親は家族計画により

妊娠し、その家庭は子供に対し栄養ある食事、清潔な住宅並びに基本的医療を与えるのに十分な収入が確保でき、また、政府は環境に対し正面から立ち向かい、自然保護に努めることができるようになって初めて、地球規模の環境問題について考えることができるのである。

次に、保持すべき自然の条件について、地球表面の七割を占める海洋の汚染状況、先進国の象徴といわれた大気汚染等の公害の状況、熱帯雨林の伐採による生態系の破壊状況等を紹介するなかで問いかけている。

第三世界中心に広がる熱帯雨林は、生物の多様性の点からも、ゴムやキニーネのように有用な植物が存在する可能性の点からも重要であるので、開発による伐採は問題である。著者いわく「三つの大陸の中でも、最もよく調べられているアフリカでは、毎年二百種以上の植物の新種が今でも採集されているのである。南アメリカの広大な地帯は、なお知られざる世界である」。そこで、これらの自然環境を維持するために、第三世界

が正当な国際援助を受けるとともに、国内政策等でより公正な経済発展を成し遂げることにより、自然環境の破壊のない開発を進めることが不可欠である。

最後に、環境の状況が進歩するための条件について、ストックホルム会議以降の世界的な環境問題の現状をチェックしながら、読者に投げかけている。

第三世界では、大多数の人間を含め全生物が生命的生態的危機から脱出していない。また、ほとんどの国では環境政策よりも軍備と兵器開発に巨費を投じている。しかし、ストックホルム会議により設立された国連環境計画(UNEP)は、後援するオゾン層調査研究調整委員会が成層圏オゾン層破壊の問題に限らず全世界的な問題の分析調査のモデルをつくるなど、国際的な環境機関として種々の成果をあげているが、今後も、国連諸機関の全面的な協力のもと、さらに多くの成果をあげるよう推進すべきである。著者は「環境の選択は、人間社会のあるべき姿、そしてその社会を支える自然環境の質を基準として決めなければならない。より人間のな、より生きるにふさわしい世界を創る努力の中で、環境という要素はようやく正当な評価を与えられるようになってきた。このことこそが、ストックホルム会議の真の遺産であったかもしれない」と、締めくくっている。

著者は、人間により繰り返し広げられる環境破壊のうち、第三世界に広がる森林の伐採の実態に踏み込み、その解決策を模索したわけだが、この問題の根源はその地域や国の状況にあるため、その対策も地域レベルから始めなければならない。だが、地球レベルの環境政策や制度もなくてはならないので、生態学的に持続性のある開発計画や近代技術の弊害の回避に向けて多くの援助が必要である。したがって、資源輸入大国日本は、天然資源の破壊によりどの先進国にもまして、経済的損失を被るであろうことを認識し、第三世界への経済的援助を怠ってはいけない。

△公害対策局大気課 征康則▽